

7. 成果の発信と普及

- ・ Word Press を用いて記事の作成をし、今年度の本校 SGH の取り組みや活動の発信をした。
- ・ デザインを含めより閲覧しやすい Web ページとすることや、更新頻度をより高め、活動の発信力を高めることが今後の課題である。
- ・ SNS での発信は、衆目を集めることを目的とするのではなく、生徒の日々の活動を継続的に発信することを目的とし、今後も生徒のプライバシーに十分に配慮して行う。
- ・ 冊子体で作成したものはデータとして Web サイト上で閲覧できるようにし、活動の概要などは多言語化して掲載できるようにしていく。

(1) web サイトの更新

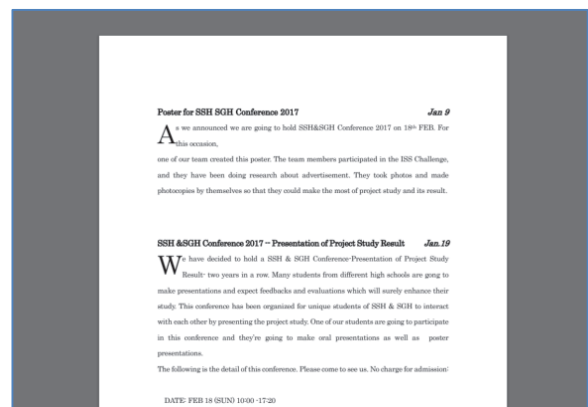
これまでと同様、本校 SGH の活動を更新した。前年度の更新回数が 27 回だったのに対し、今年度の更新回数は 25 回と数は減ったものの、海外研修の取り組みや国内の課題研究成果発表会での様子、生徒主体の研究活動 (Global Café) などの報告を充実させられた。

また、日本語を母語としない閲覧者向けに「English」ページも引き続き更新を行った。

次年度以降のグローバル部門の研究活動について、本 Web サイトで報告をしていくかは未定であるが、生徒が研究活動を通して作成することのできた成果物や、活動の様子がわかる動画のリンクを貼り、広く配信をできればと考える。



SGH の活動報告ページ



English Page の Activity Log ページ

(2) Facebook での発信状況

2016 年 12 月から開始した Facebook による成果・活動の発信状況は以下のような数字で示すことができる。

- ・ 2019 年度投稿回数 計 29 回 (2019 年 3 月～2020 年 3 月) : 月平均 2 回
- ・ リーチ数の多かった投稿 (150 件を超えるもので上位 3 件)

3 月 14 日 : 3 月 20 日に校内生徒向け今年度最後の Global Café 開催。今回のテーマは e-sports!

(e-sports をテーマにした研究チームによるディスカッション開催予告) 171 件

4 月 19 日 : 4 月 27 日は「ねりま緑の教室」へ是非!! (都市農業サミットの一環としてのワークショップ開催予告と課題研究紹介) 169 件

4 月 27 日 : 都市農業について研究しているチームのワークショップが開催されました!

(4 月 19 日に予告したワークショップの開催報告) 199 件

・シェア数の多かった投稿（上位3件）

4月27日：都市農業について研究しているチームのワークショップが開催されました！

（4月19日に予告したワークショップの開催報告）20件

9月1日：「日本一大きなやかんの話」（原発についての意識改革についての研究チームによるドキュメンタリー映画）福島映像祭で上映予定 14件

4月19日：4月27日は「ねりま緑の教室」へ是非！！（都市農業サミットの一環としてのワークショップ開催予告と課題研究紹介）11件

昨年度分析したように、社会的に影響の大きいキーワードが並ぶ方が、関心度は高くなる。一方で本校の今年度の傾向としては、実際の作品や行動に関心が寄せられているケースが多く、都市農業サミットのように、広く行政側からも広報されている活動や行事との関連があるとリーチ数もシェア数も高くなる傾向があることが分かる。

本校SGHのFacebookページは公開しており、以下から閲覧できる。

<https://www.facebook.com/tguiss.sgh/>

（3） 報告書・論文集・ポスター集・課題研究ガイドの配布と情報提供

成果物での発信としては以下3点を毎年約200冊配布している。

- ・「平成27年度指定スーパーグローバルハイスクール研究開発実施報告書」
- ・「スーパーグローバルハイスクール課題研究論文集」
- ・「課題研究成果ポスター集」（カレンダー機能付き）

論文集は外部へ配布するほか、ファイナリスト・セミファイナリストとなった生徒達にも提供し、本校の図書館・管理機関図書館へも収めている。

ポスター集は全校のHRや特別教室などに掲示し、全校生徒が月ごとに違った研究成果を見られるようにしている。

上記3点については、本校SGHのWebサイトから見られるようにする予定で、成果発信と同時にペーパーレス化を図っていく予定である。

また、本校が一昨年度から独自に作成している「課題研究ガイド」は年度ごとに内容を改訂し、全校生徒に配付し、1年生から6年生までの体系的な指導に活かすことをねらいとしている。「課題研究ガイド」は本校への来校者で希望される方には現物を提供している。今後は課題研究ガイドもWeb上で閲覧できるようにする予定である。

本校SGH Webサイト <http://www.iss.oizumi.u-gakugei.ac.jp/sgh/news/>



写真上：本校作成 課題研究ガイド 2017-2020

©Tokyo Gakugei Univ. International Secondary School

(4) SGH 情報交換会・SGH 最終年次事業報告会

今年度は以下2回のSGHの事業成果を報告する会を設定した。それぞれの機会に本校の卒業生や在校生に参加してもらい、現職の先生方や教育関係者の方々と問題や情報を共有できたことが収穫である。

1. SGH 情報交換会（於 東京学芸大学附属国際中等教育学校 授業研究会）

日時 2019（令和元）年11月22日（金）14:20～15:15

※同日公開授業Ⅱと同時間帯にて実施。

場所 本校総合メディアセンター

参加者 事前申込者当日参加者含め 約20名（本校教員は除く）

概要 本校SGH5年次までの簡単な事業報告

卒業生の体験談

外部支援者からの情報提供・「課題研究」への外部からの評価

質疑・情報交換・名刺交換

招待スピーカー

長谷川亮祐（オトナタチ合同会社）

岩瀬 風香（本校4回生卒業生 上智大学）

本校在学時研究テーマ「ネパール女子力アッププロジェクト」

佐藤 連（本校7回生 早稲田大学）

本校在学時研究テーマ「Programming Of the Kids By the Kids For the Kids」

運営責任者 本校SGH委員会 主任 杉本紀子

当日運営 本校SGH委員会

○卒業生の体験談ではそれぞれから以下のようなコメントがあった。

岩瀬

SGHの支援は指定された初年度当時6年生だったので1年間弱しか受けられていない。当時はネパールの女性を取り巻く問題を扱い、その原因の一つとして女性が経済的な負担となっていることにたどり着き、経済的な自立をサポートする提案というところで終わった。研究としての収穫はあまり得られなかったが、個人的収穫としては開発という分野に興味を持ち、大学に入学してからもその分野で研究を進めて行けたこと、またフィリピン研修時に訪問したADBで職員の方の話を聞き、国際機関で働くには大学院に進まねばならないことを知り、その後の進路のビジョンを持てたことがある。

佐藤

在校時は小学生へのプログラミング教育について研究していた。2020年度から必修化される小学校で、いかに小学生にプログラミングを教えていくかという課題に対して授業計画を立てたりもした。最終的には小学校で自分たちの作った授業計画で小学校の先生に授業を実践してもらうことができた。SGHの取組を通しては、例えばプロジェクトを立ち上げてそれを完遂させるというスキルや発表するスキル、調査を行なうスキルを得た。しかしそれよりも大きいのは「視野が広がり、世界の見方が変わった」という点である。「世界は自分たちの力で変えられる」とSGHの取組でもよく言われるが、実際に研究を行ってみると、世界はもっと複雑で、そんなに簡単に変わらない。そうした中で研究を通して自分たちで世界を変えようと、もがいた経験が一番大きかった。

○オトナタチ合同会社の長谷川亮祐氏のプレゼンテーションでは以下のような点が本校での取り組みから見えたこととして報告された。

- ・本校と共有している課題意識は「課題研究で『学び』や『成長』は起きているのか（＝人生に影響はあるのか）（＝学習指導要領のねらいは達成できているのか）」という点である。
- ・取り組みの中で重視した点は「自分の解像度（自分の価値観や強み）」「社会の解像度（社会・企業視点、キャリア観）」「学び・成長の解像度（スキルアップ・行動量・振り返り・教えない）」。
自分の解像度と上げるといのは「濃い人生にする」ということ。社会の解像度については、高校生は社会で今何が起きているのかを基本的に知らない。そこで見える社会の解像度を上げるために彼らの興味関心に応じて社会で求められていることや起きていることを説明するようにしている。学び・成長の解像度に関しては行動量を非常に重視している。圧倒的な行動量なくしてスキルアップはない。また教えないという点も重視している。具体的には失敗が分かっているも事前には止めないというスタンスをとっていたりする。
- ・実施内容は
担当メンターとの 1on1 の定期的・継続的（月 1 以上）のオンラインミーティング
週 1 回の授業 ゼミ形式
※現在オトナタチ合同会社では会社として「1on1 college」というプログラムを提供している。
本校で行っているのも基本的にはこのプログラムである。
- ・出席者と共有したいとしては以下の点がある。
 - * 学生と教員の力点の乖離がある。教員側は探究学習のサイクルの中でも「情報の収集・整理分析」のことを伝えていることが多い。が生徒が一番悩むのは課題の設定である。パーソナルプロジェクトを終えた段階でも生徒が反省するのはその点が多い。このプログラムを受けている生徒の満足度調査では、5 段階評価で「とても満足」「満足」が 100%。そうした高い満足度の背景には「課題設定にちゃんと向き合えた」という意識がある。自分のことを徹底的に話し、聞いてもらえたという経験が満足感につながっている。こちらとしては私的な経験や思いを聞くことが目的なのではなく、それをヒアリングすることで課題設定に向かうことを手助けしている。
 - * 三大呪縛は「先行研究」「SDG s」「就職」。「先行研究」は研究するためのツールに過ぎない。しかしそれに縛られている生徒が多い。教員もそれを重視しているような指示をしたりしている。また「SDG s」も社会的な注目度も高いが、生徒にとっては「SDG s」しかやっちゃいけないのかと困惑しているところもある。生徒全員が世界の貧困に取り組まなくてもよいはず。SDG s に象徴されるような「社会課題」以外の興味関心を否定すべきではない。本校とはこの点で理解が一致している。
 - * 優先順位と時間の使い方に乖離が生じている。自分の価値観に敏感にならないと自分が本当に重視していることと向き合えない。
- ・研究が上手く進む生徒の特徴としては、優先順位を自分で判断しており、テストや学校の成績に対する割り切りがはっきりしている。また、ソロで行う活動よりはチームで行う活動の方が進みが早いということが言える。

2. SGH 最終年次事業報告会（於 ISS チャレンジ課題研究成果発表会兼最終審査会）

日時 2020 年（令和 2 年）2 月 22 日（土）13：30～14：30

会場 E 棟 2F 201 教室

概要 ・本校 SGH 事業の概要 外部支援の取り入れ方を中心に（ご報告）

- ・生徒課題研究事例紹介（「なにかやってみよう」から「研究」へと変貌する仕組みとは）
- ・海外研修報告（フィリピン研修）

- ・テーブルディスカッション「課題研究を充実させる学校文化とはどのようなものか」
(SGHの経験が開く可能性と今後の仕組み・仕掛け)


※テーブルディスカッションには本校生徒（在校生）も参加。

スピーカー 本校生徒計 14 名

参加者 約 15 名（本校教員を除く）

当日の配付資料を以下に示す。

① 本校 SGH 委員会からの報告資料

SGH最終年次報告会		TGUISのSGH	TGUISのSGH
2020年2月22日（土） ※東京学芸大学附属国際中等教育学校 		研究開発名（研究開発課題） 「多文化共生社会の実現を支える 組織力・対話力・実行力の育成」 課題研究テーマ 「リスク」「葛藤と軌跡」「教育」	・仮説Ⅰ 課題研究の主軸の概念化と課題意識の焦点化—「国際教養」の整備と体系的プログラム構築による課題研究の質の高度化 ・仮説Ⅱ 課題研究とその評価に際しての外部機関との連携強化 ・仮説Ⅲ グローバル・コンピテンシーの評価規準・評価方法の策定
5年間の展開と成果 [学校としての仕組み・仕掛け] ◆「課題研究」の定着 国際教養委員会が中心となって仕組み・運用の体系化が図られた。 ◆「ISSチャレンジ」の定着 SGH最終年次も60組のエントリーがあった。 →基本的に毎年エントリー数は伸びた。	5年間の展開と成果 ◆課題研究ガイドの作成と配付 「課題研究」（総合的学習の時間）における教材開発 ◆計画～最終成果（論文）まで一貫したルーブリック評価・メンターフィードバックの継続的実施 ◆評価の標準化（モデレーション）の実施 SSH/SGHの論文評価を行っている教員が全員でサンプルを用いて評価の標準化を行う	5年間の展開と成果 [生徒の変容] ① 課題研究の全体的な取り組みの定着 新学習指導要領「総合的探究の時間」の実施に向けた意識的素地が完成 ② 外部コンテストなど評価や支援を受けられる機会活用の活性化 ※ただし、学校が把握できないところで学問的誠実性に抵触する事故も起こった。二重投稿/二重応募など。	
5年間の展開と成果 ③ 課題研究を通して「問題意識」「課題意識」が強化→教科学習へ反映されている。「研究する」という仕組みがあることが「探究する」ということの意味に役立っている。 ④ 進路へのつながり SGH課題研究→大学進学→将来像へという流れで進路を考える生徒が出てきた。	仕掛けと仕組み ① ISSチャレンジ 校内コンペティション 生徒に与える動機 質の高い研究に敬意を払う文化の醸成 繰り返し「評価＝フィードバック」が提供されることによるリフレクション機会の提供	仕掛けと仕組み ② 基本的に教員が全校体制で関わる 例えば「ISSチャレンジ」について知らない教員がいない。 例えば他学年の担任もメンターや評価者になる。 教科・学年を超えて生徒と関わる。 →→→評価のモデレーションを可能にする。	
仕掛けと仕組み ③ 概念とルーブリック:IBとの連動性 ・大テーマを「概念」にすることで、テーマ設定の自由度が増す。ただし、それを意識しないと、具体的なテーマの段階で焦点がぼやける。 ・ルーブリック評価は弱点もあるが、教科目の評価に使われるルーブリックとの共通点もあるので、目標やゴールを定めて取り組むための指標になる。	仕掛けと仕組み ④ 外部支援と外部連携 ・学校自体が外部の組織や人材の支援を受けること →自分たちでは気づけない生徒の良さや悩みに気づいてもらえる。 どのように活用するか？ 目的によってフェーズを変え、フェーズによって依頼する外部の人材を変えることが必要。	仕掛けと仕組み フェーズ1:課題発見・課題設定 「問いかけ」「対話する」中で生徒が自発的に「気づく」ことが重要。 よって、このフェーズでは「指導者・助言者」ではなく「対話の相手」としての外部人材が必要	
仕掛けと仕組み フェーズ2:知識と情報の収集・整理 課題設定と並行する可能性もある。 ただし、このフェーズは「助言者」「情報提供者」であるほうがよい。専門的な知識を持つ研究者やその分野で活動している人材が適切。	仕掛けと仕組み フェーズ3:評価者 必ずしも外部人材でなくてもよいが、客観的にその時点の研究の進捗や内容について評価し、指摘ができる人材が適切。 外部発表会のポスターセッションでフィードバックを得たり、口頭発表で点数や順位ではなくコメント評価をもらえる場を活用することで代替できる。	仕掛けと仕組み フェーズ4:実行的な実行の支援者 課題研究がある程度進行し、行動や実行に移せる段階。 経費支援・物的支援・機会的支援を行ってくださる方々がいれば望ましいが、学校や管理機関がその役目を負うこともできる。	

② オトナタチ合同会社 長谷川亮祐氏からの提供資料（内容抜粋）

東京学芸大附属国際中等教育学校（ISS） SGH 活動報告書 2020. 2. 22

オトナタチ合同会社 長谷川亮祐

[ISS における活動概略]

- ・課題研究において希望者を募集・選考し、以下プログラムを展開
- ・担当メンターと 1on1 での定期的（月 1 以上）なオンラインミーティング
- ・週 1 の授業による生徒同士の課題共有・相互フィードバック

担当学年・期間・人数

- ・2018 年：4 年生（10～3 月）42 名
- ・2019 年：5 年生（4～10 月）25 名、4 年生（10～3 月）16 名

そもそもなぜ ISS の課題研究に興味を持ったか

やりたいことを見つけ・深め・仕事につなげることが個人の幸福度・社会への貢献度を最大化する。既存の教科教育では実現できない。高校生年代で、自己認識を深め、自由に課題設定し、時間をかけられる ISS での課題研究は、有効な手段に感じたため。

支援事業を通して見えていること

社会と学校・教員の「ずれ」

- ・学生が最も困っているのは「課題の設定」だが、教員が最も時間を費やしているのは論文の書き方や調査方法。学生は、情報・機会の爆発的增加により迷っている。
- ・アドバイス（外発的動機づけ）は気づき（内発的動機づけ）に勝てない。答えやアイデアを教えるのではなく、聴く・問うことが求められている。
- ・社会で、実践が少ない（ない）計画が評価されることはない。
- ・「SDGs」的なことをしないと意味がないと感じている生徒があまりに多い。社会で評価されることは「何をやったか」ではなく「どれだけやったか」、スキルより意欲。学習意欲・自己認識意欲を醸成する機会として、本来課題研究は有効なはず。
- ・課題・テスト準備・部活動を無条件に優先する学生が多い。適度にこなす・辞めるなどの選択ができない。

その他所感

- ・参加者満足度は 5 段階評価での「とても満足」「満足」が 100%。「先生・親・友人に話したことないことを話せる」が最も多い理由。加えて、LINE などメッセージ・ツールが発展したことなどコミュニケーションの環境変化により、現代の高校生の対面での会話力は低下していると感じる。
- ・ソロ活動はチーム活動に比べ、機会を自分でつくる必要があるため難易度が高く、滞りやすい。行動量なしに興味・意欲は深まらない。
- ・どれだけ対話を重ねても結果的に、好きなことを追求することを恐れ、与えられた課題・進路を選択する学生もいる。

③ 当日テーブルディスカッションの記録 (一部) ※本校教諭によるメモ

日常に「自由」→自由にかざること考える生徒多
好きなこと


危機感 → すでに活動力の人たち! ぶつれ! 学校で有利にいる
やりつけて、つきあける人遠く身近に見えた
↓
自分への危機感から、一歩外へ出てきた
↓
社会への危機感をもつようになった

1、2年のうちから、SA(RO)投稿で、社会に出たり社会的思考が育ちた
外にあること、70年代の程: とか自然に身に付いた。おた。
(この時は、考えながら、たけが!) ← なんか意味がわからず...
3年、4年で、進路や周囲の人達に目が向くようになった頃、
多くの生徒たちの「オセ環境」に気づいた。ニホ子さんの経験の総和
気がした。

討論していくと、一歩踏み出す手探いの(ニホ子さん、まだ自由か)ことが多かった
言語化していくことを重めることで、身がまが生まれるのでは。

好きなことを見つけたには... 色々ある結果に気づいた! 努力して見つけたもの
自由が楽しい! やりた!! 楽しんでいるが楽しい。

外部のプレゼン、生の声は、いい!!
① 一歩引いて客観的に見たり 整理したりする時は、先生が、リーダー
ニホ子の人! という役割、その人の強みがある人が集まることで、面白いことできる!
互いの研究を紹介しあうのはいい。プレゼンたりのサントは絶対面白い!
好きでやるから発展して、自分たちの研究分野が進路につながる。

 ← 一人一人